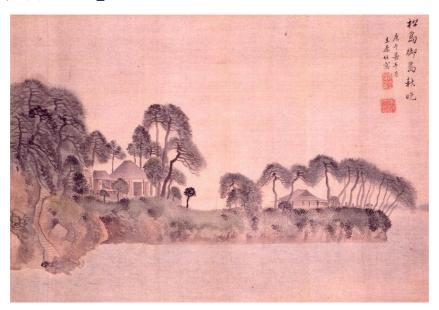
新規収蔵作品紹介

『松島御島秋晩図』



江戸時代 文化 7 年 (1810) 立原杏所筆 絹本彩色 寸法 (縦35.7 cm × 横51.7 cm) 一幅

江戸初期以来言いならされてきた日本三景の一つ、松島は宮城県松島湾内に散在する大小260余島と湾岸一帯の名勝地です。古くは、平安時代から歌枕や名勝として都人に知られる存在でした。雄島は東西に40m、南北に200mの島で松島八景の中に、「雄島夕照」があります。夕日に映える雄島の風景が名勝の一つとされました。

本作品は、文化7年(1810)の秋、杏所25歳の作品です。陸前浜街道から仙台に入り 松島の御(雄)島を、海を藍、岸辺を代赭、お堂の廻りの松樹を藍、草汁で描いたものです。 画面右から奥の細道碑などの碑、見仏堂、薬師堂、松吟庵、岩窟のある崖と、今は見ることが できない建築物のある景色を今に伝えています。何とこの景色、海側から見た景色です。 遊覧の船に乗ったのか、小舟を手配したのか・・・残念ながら記録が残っていません。松島図は、 杏所以外にも19世紀には、海側・陸側から実に多くの作品が描かれています。

杏所は二十代でさまざまな真景図を残しました。本作品以外では,「水府城真景」「豆相名勝 真図」「那珂湊図」や「袋田瀑布図」などがあります。

立原杏所

天明5年(1785)12月16日~天保11年(1840)5月20日

水戸藩の彰考舘総裁をつとめた儒者の立原翠軒(1744~1823)の長男として水戸下市横竹隈(現在の柳町二丁目)に生まれ住みました。享和3年(1803)19歳で家督を嗣ぎ、治紀(武公)、斉脩(哀公)、斉昭(烈公)3代の藩主に仕えました。文化9年(1812)28歳で江戸藩邸勤務となり、小石川藩邸に居住しました。江戸で谷文晁につき、同門の渡辺崋山らとも親しく交流しました。謹直な筆致で、気品のある作品を多く描きました。天保11年5月20日江戸小石川藩邸内で亡くなりました。享年56歳でした。